

虹の谷の 五月

船戸与一

集英社

虹の谷の 五月

船戸与一

集英社

虹の谷の五月

著者 船戸与一

二〇〇〇年 五月三〇日 第一刷発行

発行者 小島民雄

発行所 株式会社集英社

東京都千代田区一ツ橋二五・一〇 一〇一八〇五〇
電話 〇三・三三三〇・六一〇〇 (編集部)

〇三・三三三〇・六三九三 (販売部)
〇三・三三三〇・六〇八〇 (制作部)

印刷所 凸版印刷株式会社
製本所 加藤製本株式会社

定価はカバーに表示してあります。

©2000 Yoichi Funado, Printed in Japan ISBN4-08-774467-1 C0093
乱丁・落丁本が万一ございましたら小社制作部宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは法律で認められた場合を除き著作権の侵害となります。

虹の谷の五月

目次

ジャビーノ

13歳

……………1998年5月

——フィリピン・セブ島

7

ジャビーノ

14歳

……………1999年5月

——フィリピン・セブ島

161

ジャビーノ

15歳

……………2000年5月

——フィリピン・セブ島

319

装丁
安彦勝博

虹の谷の五月

山のあなたの空遠く

「幸」住むと人のいふ

ああ、われ、ひとと尋めゆきて
涙さしぐみ、かへり来ぬ

カール・ブッセ 上田敏訳

ジャ・ピーノ

13歳

……1998年5月——

フィリピン・セブ島

夜風とともに星明かりが窓からはいり来んで来てるけど、おいら、まだ当分は眠れそうにもなかった。ちらっと腕時計を見た。もう十一時を過ぎてる。夜でも針が見えるのは蛍光塗料というやつが塗ってあったからだ。時間確かめると、よけい眼が冴えて来た。ついつい明日のことを考えちゃうんだよ。ゴールデンアローは勝てるだろうか？ そればっかりが頭に浮かぶ。蹴爪もちゃんと研いだし、やることはぜんぶやったんだ。何度もじぶんにそう言い聞かせた。でも、やっぱり同じ質問が浮かんで来る。ゴールデンアローは勝てるだろうか？ 隣りでは爺っちゃんいびきの鼾が聞こえて来ている。明日の朝はふだんより早く起きなきゃならない。無理にでも眠っちゃおう。そう考えて、おいら、胸に掛けてあるタオルケツトを顔まで引きあげた。

それでも眠けはやって来ない。

おいら、だんだん焦って来る。

タオルケツトを引き下げて体を起こそうとした。何となく喉が渇いて水でも飲もうと思ったんだよ。このときだった、何かの音が聴こえた。爺っちゃんの鼾のあいだ

を縫って、それは聴こえて来る。足音だ。三人か四人はいる。こんな深更にだれなんだろう？ 足音がこっちに近づいて来た。

おいらはタオルケツトの端を掴んだままそれを聴きつづけた。

その足音が戸口のまえでびたりと停まった。

扉は鍵は取りつけられていない。

けど、すぐにはだれもはいって来なかった。

おいら、身動きもしなかった。このガルソボンガ地区に住んでる連中ならこんなことはしない。だれでも勝手に家のなかにはいつて来る。だれなんだろう、いったい？ おいら、莫塵ゴゼンのうえに横たわったままじっとそれを考えつづけた。

扉がやがてこつこつと叩かれた。

爺っちゃんの鼾が停まった。扉を叩くこつこつこつという音がだんだん大きくなった。隣りで体が動く気配がした。眼を醒ましたんだ。爺っちゃんが半身を起こして、椰子殻やしがらのなかで砂を混ぜるようないつもの声をこっちに向けた。

「マツチを貸せ」

おいらはようやく体を起こした。爺っちゃんが半身を振じる気配がする。枕もとに置いてる眼鏡めがねを手にして、それをかけたんだろう。こつこつこつという音はさらに

大きくなってる。壁際に置かれてる徳用のでっかいマッチ箱を手探りで掘んだ。それを爺っちゃんのようにまわした。

爺っちゃんがマッチを擦り、やっぱり壁際に置かれてるランプを引き寄せて、それに火を点けた。家のなかがじわじわと明るくなっていた。爺っちゃんがランプを手にして立ちあがった。腰巻一枚の姿だ。おいらも。扉はまだ叩かれつづけている。爺っちゃんは土間に降り、戸口のほうに歩いていった。

おいらもその背なかを追った。

爺っちゃんが扉を引き開けた。

ランプの光に三人の男が照らしだされた。みんな四十過ぎで、全身から草の匂いが漂って来る。左肩に自動小銃をかけていた。射ちかたを教えてもらったことがあるからわかる、M16というやつだ。三人のうちのひとりが柔らかな声で言った。

「ガブリエル・マナハンさんですね？」ピサヤ語だったけど、おいらたちが使ってる言葉とちよつとちがう癖がある。「新人民軍の者です。革命税の徴収に参りました」爺っちゃんはずぐには何も言わなかった。

おいらも黙ったままだ。この連中はガルソボンガ地区の西に聳えるメルナンガ山の中腹にある蝙蝠台地というところに住んでる。どうしてそこが蝙蝠台地なのか、

おいら、知らないし、爺っちゃんもわからない。とにかく、もうずっとそこで暮してるんだ。おいらは胸がどきどきして来る。

そいつが諭すようにもう一度言った。

「徴収に来たんです、革命税の……」

「こんなところで暮してるんだ、金銭なんかほとんど持つちゃおらんぞ」爺っちゃんがすこしだけ声を荒らげた。

「なかをよく見てみい、目ぼしいものはありやあせん」
「お志しだけで結構です」

爺っちゃんが黙ってランプを手にしたまま莫塵のほうに戻って来た。光から離れたので三人の顔が真っ黒になった。ただ眼だけは光っている。星明かりのせいだ。気配で爺っちゃんが莫塵のうえに脱ぎ棄ててあるズボンを引き寄せるのがわかった。ポケットに仕舞い込んである財布を取りだそうとするのだろう。おいら、どきどきした。明日か明後日バリの町でいろいろ買わなきゃならない。財布のなかにはその金銭がはいってるのだ。爺っちゃんが戸口に戻って来た。左手には百ペソ札が十枚ばかり握られてる。爺っちゃんはそれを差しだして言った。

「これでいいかね？」

「革命への御協力感謝します」そいつはその札を緑色の長袖シャツの胸ポケットに収めながら言った。「食糧のほうもすこし御協力いただけたらと思いますが……」

「米ならすこし」

「それで結構です」

爺っちゃんがこっちに向かつて顎^{あご}をしゃくった。米を一袋だけ持って来いと言ってるのだ。おいらは土間の水^{みづ}甕^{がら}のほうに向かい、そのそばの棚のうえに置かれている麻袋を掴んだ。ふたり暮しだから二十日ぶんほどの米がはいってる。戸口に戻ってそれを爺っちゃんに手渡した。麻の米袋が差し出された。爺っちゃんがふっと溜息をついて言った。

「出せるのはこれだけだぞ」

「御協力をどうも」

「他の家もまわったのか？」

「これからです」

「リベルタ婆さんのところだけは駄目だぞ。病気なんだし、働き手もおらん」

「わかりました、御忠告を感謝します」そいつはそう言うてからちよっぱり口調を変えた。「それにしても皮肉なもんですね、ガブリエル・マナハンさん、五十数年まえはフクバラハッピーだったあなたがいまはジャピーノと一緒に暮してる……」

「どうして知っとる、そんなことまで？」

「見くびって欲しくないですね、新人民軍の調査能力を。わたしたちは革命税の徴収を行なうとき、それなりの情

報を集める」

2

新人民軍の三人が立ち去っていくと、爺っちゃんは水甕^{がら}のそばの棚からラム酒の瓶を取りだして莫座^{もざ}のうえで胡座^{こざ}をかいた。ランプは点けっ放しのままだ。おいらも甕^{がら}からコップに水を汲んだ。糞^{くそ}つたれが！ 糞^{くそ}つたれが！ 爺っちゃんがそう吐き棄てながらラム酒を喇叭^{らっぱ}飲みしはじめた。

おいらもその向かいに座ってコップに唇を近づけた。新人民軍の連中がここに来たのはこれがはじめてじゃない。三年まえも深夜やって来て革命税を徴収していった。さつきとはちがう男たちだった。よけいな口は叩かなかった。けど、いま来たやつらはどうしてこのガルソボン^{バランゴン}ガ地区^{バランゴン}でのおいらの呼び名を知ってるんだろう？ おいらにはトシオ・マナハンというちゃんとした名まえがある。最初みんながジャピーノと呼びだしたとき、おいら自身それがどういう意味なのか知らなかった。ようやくわかったのは四年まえだ。それはフィリピン人と日本人の混血という意味だった。これを知ったときはむっと来たけど、いまはもう慣れた。そう呼びたいやつには呼ば

せればいだけだよ。べつに腹も立たない。おいらはゆつくりとコップの水を喉に流し込んだ。

顔なんか憶えてないけど、おいらは三歳まで母親とマニラで暮してた。十年もむかしのことだからどういところに住んでいたのか記憶にない。爺っちゃんは何も教えてくれなかったけど、地区首長のエドアルド・チャペスさんの話だと、おいらの父親はトシオ・マツモトという日本人らしい。相手が妊みこもったことを知ると、その日本人はマニラから消え二度と戻って来なかったという。けど、相手はその日本人が忘れられずに生まれて来たおいらにトシオという名まえをつけた。

チャペスさんには、おいら、ときどきすぐくむかつくことがある。眼つきが厭いやらしいし、聞きたくもない話を喋ることがあるからだ。チャペスさんが言うには、おいらの母親はおいらを育てるためにいかかわしい商売をはじめた。その結果、おいらが三歳のときにエイズとかいう病気で死んだ。それでセブ島のこのガルソボンガ地区に住む爺っちゃんのとこに引き取られたのだと。けど、おいら、ほんとうかどうかはだれにも確かめてない。

「ねえ、爺っちゃん」

「何だね？」

「あいつらのビサヤ語、ちよっとおかしくなかった？」
「ネグロス島の出身だ、たぶん。わしらがビサヤ語のセ

ブ方言を使うように、あいつらはネグロス方言を使う。しかし、通じなかったわけじゃないかろう？」

「うん、言ってることはぜんぶわかったよ」

「糞くそつたれめらが！」

「ねえ、爺っちゃん」

「何だ？」

「あいつら、言ってたね、五十何年かまえは爺っちゃん
はフクバラハップだったと。あれ、どういう意味？」

「知らんでもいい、そういうことは！」

おいらはその声の強さにびっくりした。爺っちゃんの声はいつものように椰子殻のなかで砂を混ぜるような響きじゃない。やけにぎらぎらしてる。たぶん、怒ってるんだ。こんな爺っちゃんははじめてみた。おいらは黙ってコップの水を飲み干した。

「もう寝ろ、おまえは。明日は早い」

「やめたほうがいいよ、爺っちゃんもラム酒……」

「やかましい！ これぐらいの酒で酔いはせん」

おいらはあらためて爺っちゃんを見た。今年になって急に老いが進んだような気もする。爺っちゃんはいま七十六だ。痩せている。皮膚はかさかさで、腹のところは破裂したゴム風船みたいに皺が寄ってるし、顔には黒い染みがいっぱいいついてる。髪と口髭は真っ白だ。爺っちゃんらが枕もとに置いてた煙草のパッケージから一本抜き

取って銚え、マツチを擦って火を点けた。そのけむりが眼に沁みたら、眼鏡を取って左手の甲で瞼を拭いた。この眼鏡の縁は籠甲というものでできると聞いた。爺っちゃんと言ったことがある、わしが長年持つてるもので値が張るのはこの眼鏡と総入れ歯ぐらいのものだとおいら、いま十三歳だ。だから、何もかも爺っちゃんに面倒を看てもらってる。けど、十五歳になったら逆に爺っちゃんもつと老けるだろう、そのときはちゃんと世話しなきゃならない。そう思いながら、おいらはその顔をじっと眺めつづけた。

「何で見てるんだ、わしを？」

「べつに……」

「寝ろと言ったら寝ろ」

「わかったよ、寝りゃいいんだろ？」

「わしを起こせ、明日の朝」

「何時に？」

「六時。いや、六時半でもいい」

おいらは頷いて莫座のうえに体を倒し、タオルケットを胸に被せた。眼をつぶった。また頭のなかに浮かんて来る。ゴールデンアローは明日勝てるだろうか？ この声がどこから響いて来るかぎり、すぐには寝つけそうにない。そう考えたときだ。おいらは爺っちゃんの呟き声を聞いた。

「ひどいもんだ、まったく際限がない。いったい、新人民軍のなかはどうなつとる？ あれじゃ盗つ奴と変わりやせん。いや、もつと性質が悪い。貧乏人から金銭を巻きあげるのに革命を口にしやがるんだからな。わしらはああいふ真似だけじゃなかった。組織のなかでの権力闘争だけに明け暮れておるから、あんなふうになつちまいやがるんだ……」

3

窓から朝の強い陽が差し込んで来て瞼を突き刺し、おいら、その眩しさに眼を醒ました。腕時計を見た。針は五時三十九分を指している。この時計はおいらが爺っちゃんに引き取られたとき、死んだ母親の遺品として一緒に持って来られたものだと言う。男物だ。セイコーという日本の会社で作られたものらしい。爺っちゃんは何も説明しないけど、地区首長のエドアルド・チャペスさんに言わせると、おいらの父親トシオ・マツモトがマニラから消えるとき残していったにちがいないそうだ。だとしたら、ずいぶん古い物だけど、ちゃんと動く。おいらは母親を妊ませて棄てたその日本人にべつに恨みなんか持つちゃいない。見たこともないんだから。それに、

だれが残した物だろうと、動けばいい。この腕時計はぶつ壊れるまで使いつづけるつもりだ。体を起こして莫塵から土間に降りた。甕から盥に水を汲んで、顔を洗いを漱いだ。それから、竈で火を熾した。鍋に米と水を入れてそこに掛けた。炊きあがったのは六時二十分ごろだ。おいら、鍋を竈から下ろし十分ほど待って莫塵のうえに横たわったままの爺っちゃんのを揺すりながら言った。

「六時半だよ、起きなきや」

「もうすこし寝かせてくれ」

「駄目だよ、起きなきや」

「宿酔いなんだ、あと一時間寝かせろ」

「遅れっちゃうよ」

「大丈夫だ、午後の部に充分間に合う」

「起きろってば、爺っちゃん」

「あと一時間眠らせてくれ」

おいら、諦めてTシャツを着た。ズボンも穿いた。莫塵から土間に降りてサンダルを引掛けた。爺っちゃんに最近めつきり酒が弱くなってる。ラム酒なんか飲まなきやよかったんだ。そう思いながら、おいら、戸口に向かい扉を引き開けて家を出た。

ガルソボンガ地区がどれぐらいの広さなのか、おいら、数字では説明できない。通ってる中学校で習ったような気もするけど、何へクタールぐらいあるのか憶えてない

んだ。でも、かなり広いことは確かだ。中学校やカトリック教会の土地も地区のものだし、地区全体に属している畑もある。ここに住んでるのは四十二家族で、人口は二百四十三人、いや、五日まえにトブラカンさん家で赤んぼが生まれたから二百四十四人だ。家と家とのあいだはどこも二十メートル近く離れている。他の地区では道路沿いに固まって住んでるところが多いけど、このガルソボンガ地区だけはみんなばらばらに住んでる。

おいらは家を出るとまっすぐラモンの家に向かった。陽差しが強い。昼間は噓せかえるほど暑くなるだろう。ラモン・スムロンはガルソボンガ地区の中央を流れる小川の向こうに住んでる。この川には名まえがついてない。それほどちっちゃな川なんだよ。乾季には水がなくなるけど、その小川のそばに泉が湧いてて、飲み水には困らない。地区首長のチャパスさんの家を通り過ぎ、水のないう小川に近づいた。おいらはラモンが好きだ。朝飯のおかずをくれるからじゃない。ほんとうに男らしいし、おいらも将来あなりたいと思うてる。ラモンは今年二十四歳だ。ガルソボンガ地区では男も女も中学校を卒業するとほとんどがセブ・シティとかマニラに出かけたまま戻って来ないのにラモンはずっとここに残ってる。農業をやりながらガルソボンガ地区を立てなおすことが一番大切なんだといつも言ってる。両親はもういない。妹の